

幼児教育実際指導研究会

分科協議会より



音楽リズム

指導 戸倉 はる

古江 綾子

学校ダンスのありかた

戸倉 皆さんは「遊ぎ」、「リズム遊び」、「表現遊ぎ」、「音楽リズム」などいろいろな言いますが、これらはいずれも「ダンスをする」ということに帰一します。

ダンスは、私たちの思っていることを身体で表現することです。もえるような新緑を色で表せば絵が出来、ことばであらわせば詩歌や作文になり、また、音で表せばさわやかな音が出るかもしれません。

そしてこれをつなげると初夏の曲が出来るでしょう。空は青々として、まわりは緑、心ははつらつとしている、これをからだであらわせばダンスが出来ます。しかもこのダンスは生きたからだが土台となって作文するので、すから、そこには運動と情操が出てきます。

これがダンスであり、遊ぎであります。では、なぜわが国にダンスをとり入れたのでしょうか。

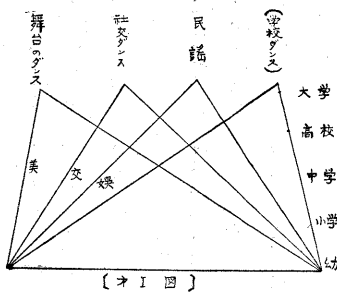
明治の初年には、ダンスは運動になり、し

かも緩和であるから女子に最も適している、と言われました。明治十年頃には体操が輸入されましたが、これは過激であるので体操として取り入れられました。大正期になり、学校ダンスは運動と情操の両方であると提唱されるようになりました。一部には学校ダンスは情操でなく運動だけだという提唱もありましたが、からだから出てくる情操はダンス以外になく、昭和の今日では、運動と情操の密接な関係はゆるがせないものになっております。

何しろ、ダンスは自分の思うことをからだで表現するのですから、ずいぶん古くからあったろうと思われれます。パチカンの博物館やパリーのルーブル博物館にある壁画や道具に

は、紀元前三、四年前のダンスのようすがうかがえます。

ダンスは国や地方や民族により、またダンスの構成により種別できるけれども、現在の生活の中からわけてみますと、舞台ダンス、社交ダンス、民謡(外国ではフォークダンス)などがあげられます。これを目的の上からわけると第一図のように、舞台ダンスは美術(芸術)として、社交ダンスは交友のために、民謡は娯楽のためということになります。小学校その他の体育の中には、体操、スポーツ、ダンスという三つの素材が、どちらへもかたよることなく適宜に教育されています。



舞心共に育った中

学からで、小学校では「リズム遊び」幼稚園では「遊び」と言ってダンスの末分化のものやっているわけです。

さて、ここでいかなるダンスをしたらよいか考えなくてはなりません。

ダンスは自分の思うことをからだで作文するのですから、必然的に「創作」ということが出てきます。皆さんの悩みは、まさにこの点ですね。創作はたいへんむずかしいもので、何も無いところからは決して出てまいりません。戦後、図画・工作・音楽・体育ダンスというような姉妹学科はそのため非常に苦労しました。ものをやる場合、ひとりできるところはまずありませんから学ばなければなりません。まずまねて、それから自己を出していくことが大切です。

皆さんのダンスも、いきなり創作を子どもにぶつけてはいけません。まず見せ、学ばせまねさせることをしっかりと子どもにさせなければならぬのです。

明治の末期につくられた「春がきた」はどこでも楽しく歌え、また「おぼろ月夜」も誰

もが歌えるようにしたい。日本には人が寄れば誰でもすぐ踊れるというものがありません。例えばイギリスでは、歩く、走るなどの非常にやさしくて小学校一年生でも出来るものを一つもっています。日本でもこういうものを持ちたいと思います。音楽においても名曲をすてたくないものです。

遊びもこれと同じで、ろくに走ったり歩いたりすることが出来ない子どもに「さあ、あれもこれもしなさい」とさせるものではありません。昔からあるよいものを捨てずに子どもに与え、それがもっているリズム、表現の内容などを知らずしらすのうちに子どもに感得させることが大切です。そしてそこから何かを考えさせることです。

要するに、遊びは既成の作品の良いものを適宜に配分して子どもに理解させることです。これが創作への道であると思います。

小学校の先生からみた卒園児童

古江 この頃幼稚園教育がさかんであることを一番痛切に感じるのは小学校の先生です。

幼稚園に行かない児童数は年々減少し、この

ため小学校教育がやりやすくなっています。

小学校では、音楽リズムは音楽と体操に分けられますが、リズム感、和音感、旋律感、観念ではなく、実際にからだの動きを通して、しかも小さいときから数多くさせることによってつくのです。また体育の面から考えますと、動きのあるところには必ずリズムがついておられます。子どもたちに身体活動をさせるとき、リズムを与えることによりよく動かせるし、旋律があると、よけい気持よく出来ます。

このような点から小学校では、体育三時間、音楽三時間をとっています。そして一年生には毎日音体を二十分ずつさせることが理想です。頭が疲れたら歌って休ませるといシステムがよいのではないかと思えます。

小学校で用いる歌と、幼稚園で使われる歌との関連について

古江 日本古来から使われ親しまれている「むすんでひらいて」「ちょうちょ」「日の丸」などは、幼稚園でも小学校でも大いにやっています。この場合、幼稚園と小

学校では環境や取り扱いかが異なります。小学校では個人教育でなく、集団教育でありますので、大勢の子どもにも速度の変化、リズム、強弱などをいかにしてうまく指導するかが問題になってきます。ここで一つ問題に思うのは、幼稚園ではずいぶん難しいものやうっているのではないかとことです。この頃の子どもは、音域が三度ぐらい下ってきています。それなのに自分の声より高いものを歌うので、リズム感にくらべて旋律感が薄くなっているように思います。経験から得るところが大切ですから適当な曲を使うことがよいのです。聞かせるレコードの音域が狭くなく

てはいけない、ということではなく、また子どもの耳に入ったものは全部歌わせ、覚えさせなくてはならないというのではありません。この歌は歌えないが、聞くのにはこの方がよいという場合があるのです。小さいうちからよい音楽を聞かせ、リズム感を備えつけることが大切ですから、良いものならば何でも聞かせ、大いに楽しんで下さい。このとき例えば合奏を楽しむ上に動きをも伴うなら

ば、より効果的に能率的にのびていくのではないのでしょうか。できるならば話も歌でやっていたきたいと思うのです。「おべんとう」や「さようなら」などを歌と動作だけで出来るのは幼稚園だけなのです。

発達段階に適した器楽指導について

古江 小学校の場合、指導要領では一年生はリズム楽器の種類をおぼえ、奏法を覚え、使いこなせるように決められていますのでこれだけは出来なければなりません。

鍵盤楽器のさぐり弾き、ハーモニカなど身近かにおいて自由にさわらせてみます。木琴はメロディーがなくてよいから一本でリズム打ちをさせます。色音符は賛否両論がありますが、色からの感じを先に受けますので、幼稚園期だけで、小学校からはしない方がよいと思えます。

× × ×